

えどがわの女性

vol.31
2016年
12月



江戸川区
聞き書き
研究会

聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「幸せに育ってほしい」

たか かし あつ こ
高橋 充子

1936年(昭和11年)
長野県上伊那郡生まれ
春江町在住



■ 婦人学級と出合って

昭和47年頃、わたしたちが勉強した時は婦人学級というのが江戸川区にあったんです。いくつかの学校を回って、暮らしの中で女性に必要なことを学ぶのでした。この講座が、社会教育に興味をもつきっかけとなって、受講生や地域の子育て仲間と一緒に自主サークルをつくり学習会を始めたんです。家庭教育が主なので、だんだん若いお母さんたちも集まってくるようになりました。

子連れで参加するのをためらうお母さんたちにも、遠慮なく参加してもらえるように、わたしたちが子どもを預かるからと提案し、実現したのが保育付き家庭教育学級です。保育ボランティアもはまりました。こうした活動が、江戸川区全体をつなげる家庭教育サークル連絡会へと発展しました。

「子ども時代」を幸せに育って欲しいと願い続けて30年間会長を務めました。しかし社会は変化し、若い世代の方に代わったほうが良いと実感して会長を退きました。振り返って考えると、すべての関係者の皆様に支えられて活動できた幸せな期間でした。

当時、偏差値がすべての子どもたちの評価であった時代でした。これに疑問をもったわたしたちが、学歴がなくても立派な社会人になっている人を講師に招き、子どもたちの良い点を伸ばす親になろうと合同学習会を計画しました。有名人を講師にしなくても地味に学習したら良いという意見を当時の担当課長さんにいただきました。しかし、なんとしても大勢のお母さんたちに聞いて欲しくて、粘りに粘って熱意を感じていただき、文化センターの大ホールを提供していただくことができ嬉しかったですね。今でもこの第一歩があったからこそ家庭教育サークル連絡会が認められてきたと感謝の気持ちでいっぱいです。

■ 先生がほめてくれた一言で

昭和11年3月、6人きょうだいの3番目に次女として長野県の上伊那郡で生まれました。天竜川が流れていてその向こうには中央アルプスが見えるところよ。畑には父が掘った防空壕があって、警戒警報が鳴った際に近所

の人たちと1度だけ入ったことがあるけど、震災は受けませんでした。

食べ物は、あまり不自由しなかったですね。田んぼがあったから大きなタニシをお汁の実に、イナゴは佃煮にしたの。実がなれば柿の木にも杏の木にも登って食べたんですよ。電信柱にも登ったし、いつも野山を駆け回っているような女の子でした。だから母に放っておかれたんですよ。風邪をひいた時に、初めて母が「熱大丈夫?」とか言ってきたの。それがすごく印象に残っていて。ああ病気になる、気にかけてくれるんだ、と。でも風邪なんてその1度きりですよ。

終戦を迎えた小学5年生の時、男の先生が担任だったんです。国語の授業中のこと、教科書を読んでいる時に、「これ、どういう意味ですか」と訊ねたことがあるの。その先生に「ああ、おまえいい質問だな」と言われて。軍隊帰りのおっかない先生なのに、その一言で勉強がものすごく楽しくなったの。どんどん勉強するようになりましたね。この先生に出会えなかったら今のわたしはないと思います。

冬は水道管が凍結するほど寒い山間なので、お水が出なくなることもあったの。ある晴れた日、わずかに凍結が緩んでやっと1杯溜めたバケツのお水を、掃除の時に取っ合いになったんですよ。先生に「こらー」って怒られて、バケツを取り合った生徒たちが並ばされて、向かい合わせの子同士で往復ビンタ。で、わたしの相手は小さな子だったのでかわいそうだからと思い、ショツ、ショツと軽く頬を叩いてやったの。ところがその子はバチン、バチン、って思いつき頬を打ってきたよ。あれは忘れられないですよ。

高校卒業時に、担任の先生に幼稚園の職を紹介され東京に移り住みました。学芸大の教員養成所に通い、通信教育も受けて幼稚園教諭の免許を取り先生の職に就きました。

次男が生まれた昭和47年に自宅の一部を教室仕様の間取りに改築し、それまでやってきた経験を活かして、この三角^{さんかく}で学習塾を開いたのです。この辺りにまだ田んぼ^{はすだ}や蓮田がひろがっていて、ウシガエルが鳴いていたころのことですよ。

町会の子ども会会長を引き受けたことが、家庭教育

サークルを始めとするさまざまなボランティア活動のきっかけになりました。

保護司として

52歳の時にすすめられて保護司になりました。併せて更生保護女性会(更女)にも入ったんです。保護司は刑務所を出た人や保護観察期間中の人などの更生を支援するお仕事で、全くその中身を知らないで引き受けたのですが、やる気と愛情さえあれば、そんなに難しいものじゃないです。

月に2回、受け持った人と1対1で面接をするんだけど、うちに来てもらう。非行を起こしてしまったお子さんの家庭と、保護司の家庭とは明らかに環境が違うように思うんですよ。親がしょっちゅう喧嘩していたり、家出したりしている家庭だと、帰っても居場所がない。普通の家庭をみせることも仕事のうちのひとつで。その子に「お母さんとお話した?」って聞くと「面白くないよ、ここで話してたほうがいいよ」って夜中までここに居るんだから。

ある女性は、「何もできない」って言うんですよ。「じゃあ、うちの教室をお掃除しなさい」って。「こうやってお掃除するんだよ」と電気掃除機を使って、お掃除のやり方を教えたんです。「あなたならお掃除はできるよね」と励まし、解除後は「お掃除の仕事に就いた」という便りが届いたんです。生きていく力がついたのは嬉しいことでした。良好解除といって、執行猶予が2年あっても1年で「もうそろそろ解除してあげてもいいんじゃないですか」と、保護観察所へ許可をとることがあるんです。そうして「2度とわたしのところへ来ないで」とその子に言うんです。受け持った子に再犯は1人もいませんよ。

保護司は75歳で定年になるんだけど、ほとんどの人が定年までやりますね。定年後も更女の方はそのまま続けて、少年たちの社会復帰の支援活動をしています。

出所後、虐待などでうちへ戻れない人達を預かってくれる施設があって、その施設にわたしたちが毎月1回ずつお米や果物を送ってあげられます。また、ひな祭りや端午の節句には、それに相応しいようなものを持って行ってあげたり、成人式だと着物を貸して着付けもしてあげたりというボランティアも更女でしているの。

刑務所へ慰問に行く際には、区からバス1台出してもらっています。受刑者とできるだけ目を合わせないようにして、慰問するんです。

刑務所の中で技術を得て作っている商品があるのね。それをたくさん買ってあげて、その利益がその人達の社会復帰に役立つんです。

主人は「女だから保護司をするな」とは一切言わない人です。それどころか、主人も保護司やっていた時期があります。交代してもらおうかとわたしが推薦しました。ところが「女性いないから、引き続きやってください」って言われて、夫婦で保護司やっちゃったんですよ。



◆「葛西地区女性団体の集い」にて
(葛西地区ママさんバレーボール愛好会会長として)

平成2年、54歳の時に区の野村国際交流基金事業の第1期生として、オーストラリアの Gosford に研修に行かせていただきました。初めての海外でした。そこで江戸川区との姉妹都市盟約を結ぶ橋渡しをした松平みなさんにお世話になりました。街も綺麗で本を見ただけじゃ分らないと思いました。その後あちらに姉妹都市記念庭園ができて長男が結婚式を挙げました。第1号だということで市長さんが牧師役をしてくださったんですよ。

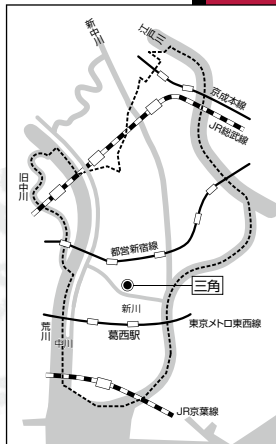
いっしょにやろうよ

体育指導委員の一環としてやっているママさんバレーボールはね、お母さんたちが楽しむものだから、みんなで出場できるようにして、ベンチに座りっぱなしの人がいないようにするの。せっかく練習しているのに、と思うしね。勝つことは目的としないで「一緒にやろうよ」というスタイルなの。

子どもが幸せに育つには、まず親がゆったりした気持ちになることが大切なんですよ。家庭内で強い者っていうとお父さんとお母さん、子どもは弱者なわけでしょう。その強い者たちにストレスが溜まっていたりすると、矛先を弱い子どもに向けてしまう。わたしも動いていたころ「職場で良いことなかったなあ」なんて思うと、やっぱりどうしても怒りたくなる気持ちがたくさんあった。

家庭教育サークルの活動は子育てを支援するボランティア、温かい家庭で子どもを幸せに育ててほしいという願いがあります。

すくすくスクールの応援も、更女をはじめ、いろんな活動を通じて出会った仲間たちが「一緒にやろうよ」と、立ち上がってくれたんです。ハワイアンダンスや茶道など、それぞれの得意分野を教えに行ったり、区内の子どもたちと触れ合う機会をつくっています。子どもたちが「幸せに育ってくれればいいな」という思いから、これからも非行を起こさない子育てのお手伝いをしていきたいと思っています。



◆インタビュー/2015年6月
2015年12月
◆聞き手/小池智恵子 吉野治子 酒井みはる
◆コーディネーター/樋口政則